

伊勢物語覚え書：その歌物語性について

滝瀬, 爵克 / TAKISE, Takayoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

13

(終了ページ / End Page)

22

(発行年 / Year)

1957-12-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018934>

伊勢物語覺え書

—その歌物語性について—

瀧 瀬 爵 克

(一)

伊勢物語は歌物語といわれてきたように、その叙事性と抒情性の二つの側面をもっている。多かれ少かれ日本古代の物語文学には、この二つの面を調和させ、前者が後者を従属させながら展開している。そこに日本の物語文学の大きな特色が形成されているとともに、他面において叙事性の展開がそのために制約されている。だがそれはあくまでも叙事性に対してであつて、その作品の文学性に対してではない。抒情性はそれ自身のうちに特殊な特質をもっているが、それがそのまま伊勢物語のすべてを規定してはいない。また逆に叙事性についてもそういえるのである。

そこで、その二つの側面が分ち難く結びついている作品のうちにひそむ文学性一般に共通する普遍的側面との具体的な連繫を、作品にそくして折出しつつ評価するのでなければ、伊勢物語独自の本質とか真価とかを誤ってとらえてしまうか、せいせいその一面しか照

し出せないことになると考える。

したがつて、抒情詩が叙事詩に比して劣るとか、またその逆であるという既成概念をもつてみようという偏向を排して、二側面の総合体としての伊勢物語という作品そのものを、他の文学一般と同様に具有する文学性においてとらえ、それをもたらしものとして、いかに両者がそれぞれの持味を発揮して、この物語を形成しているかを分析し、実証していかなければならないと思う。

また伊勢物語は、今まで歌物語という新しいジャンルを形成し、作り物語といわれてきた竹取物語とともに、対照的な二つの物語文学の嚆矢として位置づけられてきたところにも、抒情的視点からのみ考察しようとするので、それと結びあつている叙事性から生み出されている文学性の側面は、比較的等閑にふされる傾きがないではなかつた。

そもそもこの作品の面白さとかよさとかは、その抒情性にも負うところは大きいにしても、それにもまして、それをも含めたところ

のこの物語の語ろうとするストーリーのうちこそ求められるであろう。

むかしからこの物語は、時に「在五中将の日記」（狭衣物語・卷一）などといわれたが、多くは「在五が物語」（源氏・総角）とか「いせの物語」枕草子七十段）とか、「ざい中将（略）などという物語」（更級日記）とかいわれていることによつても、業平説話の語りを中心にした物語として読まれてきたことは、あらそえない事実である。そのことはやはり作品において主要な役割を演じているのがストーリーであり、読者もやはりそこに関心を注いでいたことを物語つていたのである。だが伊勢はそのストーリーを通して主人公たちの生活が、また作者たちの生活がたくされて描写されているだけではなく、それとともにストーリーとは関係のない作者の直接的な体験による感動の主観化、個性化がなされ、それが情緒化されて表現されている。この両者の統一と融合が、この物語に新しい生命を与えて、新しい文学形態を形成せしめている。後者は歌日記的要素をもち、その中心は勿論和歌であるが、それは常に物語のうちで、もつとも高潮した作者の感動のたかまりを通して表現されているのである。後者（和歌）が前者（ストーリー）と一応無関係にありうる側面を有することの理由は、作者が全く主人公業平以外の他の人の歌を、業平説話中に自然に融け込ませていることによつても知られる。それは文字通り自然に読みとられるまでに弥縫されている。なぜならば、そのフィクションは作者の実感により支えられ、主体化され、再生産されているからにほかならない。

そこで、次にそのようなフィクションを形成させた創作動機はどこにあつたか、また作者はいかなる意図をもつて、いわばこの物語

のストーリーを書こうとしたのかが次に問題になる。この問題に対してはまず作者の意図をとらえ、そこからこの物語の説話群を一貫している基調の精神をさぐることで、従来まで疑問とされてきたさまざまな問題を、一応私なりに解きほぐしてみた。すなわち『ういかうぶり』ではじめられ、『ついにゆく道とはかねてききしかど云々』の辞世の歌でおわらせているところから、これを業平の一代記としてかかれているといいながら、一方この物語の説話のうちには、業平とはまつたく関係のない説話がかなり存在していることもあわせて指摘することで、その矛盾を疑問として放置していることとであり、さらに万葉から古今、後撰にいたる歌集から業平以外の歌を、業平説話の歌として物語を構成している作者の虚構の内的必然性をとらえずに、これもそのまま放置されているということである。つまりなぜ作者は、この物語を業平一代記として徹底させることができなかったのか。なぜ業平以外の説話をこの物語のうちにおさめたのか。なぜ万葉より後撰にいたる歌集から業平以外の歌を、業平説話の歌に仕立てたのであろうか。（拙稿「伊勢物語をつらぬくもの」文学・第二十四卷・第九号）等々の問題がそれである。さらに伊勢をつらぬく基調の精神を把握することで、古来この物語に關するいくたのおびただしい註釈書や研究書が、いずれも各説話ごとに放恣な註釈や解釈や批評がくだされていたが、それらを一貫性あるものに整理し、つくりかえることが出来るのである。これらのごとについては、すでに述べたことがあるので（前掲拙稿）、ここではその結論だけを述べて先へ進めることにしたい。

その結論として私は、作者がみやびな物語を書こうと意図し、そのみやびを基調として説話群を統一しようとしている。そしてまた

当時の読み手たちも、そのようなものとして享受し、理解していたことを明かにしたのである。

それらのことをふまえて、次に歌物語といわれるこの物語が、歌と散文とをもつて、具体的にはどのようなように、「みやび」な物語として描かれているかということについて考えてみたいと思う。

(二)

まず第一四の説話「あねはの松」で、昔男が「みちのく」の女に「せちに思」われ、彼女をして、

夜も明けばきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

と歌わせながら、「京へなむいぬる」といって

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

と歌つてやつた意味がわからず、「おもひけり、おもひけり」と信じ込む女のいじらしい程のひたむきな愛を、「ひなびた」「ゐな人」(三四)へのすさびとしてあつかつてゐる。またここでは「女、京の人をばめづらかにやおほえけむ」として、女に

なかなか恋に死なずは桑子にぞ

なるべかりける玉の緒ばかり(一四)

と歌わせ、「歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれと思ひけむ、いきてねにけり」(一四)となつてゐるところから、女が積極的に「せちに思へる」心情を吐露しているのにつき動かされ、あくまでも思いあがつた「京の人」(みやびを)として、上から見おろすかたちで「あはれ」がたのであることを考えるときに、いわば民衆の生活感情を代表する「みちのく」の女の、素朴な愛情のはげ

しさに打たれながらも、真にその愛情を素直にうけとることのできなくなつてゐる昔男、いや昔男をそうさせてゐるのは、「ひなび」に対する「みやび」なる意識によるものであることが知られるのである。高木市之助氏によつてみやびの文学(「日本文学の環境」と規定された平安朝文学は、前代的な血統を尊重する精神を濃厚に背負つていた貴族から、急速に都市貴族へと変つていつた。すなわち血統だけでは彼らの自負のよりどころにはならないような社会的条件の変化が、彼らをして血統にかわるもの——都市生活者(風流者)としての意識に自負の念とそよりどころを抱いていくようにしていつたのである。ここではふれないが伊勢にはその形成過程が比較的はつきりと語られている。

さて、この説話中の「なかなか」の歌は、万葉の巻十二にあるなかなか人とあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり(三八〇六)

の改作であり、またこの歌には非常に類歌が多くあり、(万葉一〇、五四四、七二六、八一九、八六四、二六九三、二七四三、二七六五、三二〇五等々)かなり広汎に流布されてゐた民謡であること、を物語つてゐる。

なお「栗原の」の歌は、古今集(卷二十)中でも数少い東国の民謡である東歌の

みぐる崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましをの改作であるというよりは、最初の二句が「栗原のあねはの松の」と「みぐる崎みつの小島の」との個有名詞の相違であるところから、かなり流布されている類歌であろう。このような民謡をふまえることによつて「住地を現わしてゐるのは、老獪さのある虚構であ

る。中間に挟んでいる『夜も明けなば』の歌は、物語作者の作と思われる。『さすがにあはれと思ひけむ』という思いと対蹠的に、極度の鄙びた女を現わそうとの意図よりのもので、効果的である。「結末の『ひけらしは、全部を活かすに足りる巧みなものである。一段、軽いものには見えるが、教養ある階級からいうと、恋のあわれも、相手に或る程度の教養がないと、そのあわれも封じられ、失せ去つていく余儀なさを現わそうと意図したもので、笑いの為のものではない』（窪田空穂「伊勢物語評釈」）のである。つまり民衆の口誦歌を利用して東国のひなびた女とその背景を表出し、ひなびた女に対して「失せ去つていく余儀なさを現わそうと」すること、昔男を「みやびを」として描こうとしているのである。

また第十六の説話では、藤氏の外戚政策の犠牲になつた失意する惟喬親王につかえることで零落した紀有常が、「人がらは、心うつくしう、あてはかなる事を好みて、こと人にも似ず世のわたらひ心もなく、貧しくても猶むかしよかりし時の心ながら、世のつねの事も知らず」、風流な生活そのものを、強く憧憬しつづけ、妻にも愛想をつかされ、彼女への贈物すら出来ないでいる。それを知つた業平が、彼に同情して「よるの物までおくつた」という筋であるが、作者は「みやび」を慕いつづける有常だけではなく、彼に対してそのように同情をおしまなかつた業平もともどもに、「みやびを」としているのである。これはあきらかに当時の読み手である中下級貴のよるべとしての「みやび」を、極端な有常の零落した人間形象を通して訴えている。それだけに当時の読者にあたえた感動力は、今日私たちの想像以上のものがあつたにちがいない。読者たちは、恐ら

く有常に同情し、業平や作者と共に共鳴したことであろう。さらに第八三の説話では、惟喬親王が失意のあまり出家しようとする心情を暗示し、やがて「思ひのほかには御ぐしおろさせ給ひて、小野といふ所に」隠遁され、「比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。しひて御むろにまうでて、をがみ奉るに、つれづれといと物がなしくおはしましければ、やや久しくさぶらひていにしえのことなど思ひ出でて聞えさせけり。さてもさぶらひてしがなと思えど、おほやけごとどもありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

忘れては 夢かとぞ思ふ 思ひきや雪ふみわけて 君をみむとは

とよみて、なくなき帰りけり」とある。その「忘れては」の歌は「なくなき帰」つた業平の心情をよく実感をもつて詠出している。つまり、「雪ふみわけて」という句には、「雪いと高」い「比叡山のふもと」の感じがよくあらわれているし、そのように雪にとざされた山里に「つれづれといと物がなしくおは」す惟喬をいちはやく感じとつた業平のみやびさが思われる。そして「いにしへのことなど思ひ出」すにつけても、あまりにもかわりはた惟喬の様子を見て、思わず「君を見むとは」と歌つたあたりは、まさに筋と歌とがとけあつて、しみじみとした悲哀の情趣にいろどられながら表出されている。そればかりではなく、この歌はこの説話を締めくくり、読む者の心に深くその余韻を刻みこまずにはおかない文学的効果を果している。第五の説話では、「人知れぬ云々」の機智にとんだ歌故に恋をかなえたという主題をうちだす（表現手段）とし、第六五の説話では業平の「思ふには云々」という捨鉢的なげしさを語る高潮した場面の心情のたかまりを詠出している。

このように、この物語のうちでの短歌の果している役割は大きい。それは「けり」という過去の回想表現と感嘆をあらわす助動詞により抒情的、情趣的な句をただよわせた簡潔な文章とあいまつてみやびな物語を形成している。だがあくまでもこの物語では「みやび」な物語を語るという筋が中軸であり、短歌はむしろそれに従属させられている。つまりみやびな物語を書こうとした作者の意図に歌は利用されていることがわかる。従来までその作者の意図がはつきりしていなかつたがために、どのようなものに歌や散文がどのように従属されながら説話が構成されているかがよくわからなかつたのである。

それは簡単な詞書のついたものから、短篇的形態にまで整えられている説話にいたるまで、そういえるのである。たとえば、第三四の説話では、「言へばえに言はねば胸のさわがれて、心ひとつに歎くころかな」という一首の歌に、ほんの詞書ほどの地の文を配して説話を構成している。この歌は、六帖の

いへばえに言はねば苦し世の中を歎きてのみもつくすべきかな
という歌を改作して、片思いの恋をしている昔男のやるせない心情を「思ひ思ひていへるなるべし。」としめくくつていふことで、やむにやまれない恋情のたぐりを、とつさに歌にしてやらないではないられない心情——「いちはやきみやび」(一)——が語られている。さらに二首の唱和による形式をとるものになると構成もややととのい、第三三の説話をみると、今度昔男が都へ帰つたら再びもどるまいと思つている心のうちを、いちはやくみぬいた女が、すばやく「こもり江に云々」の歌を応酬し、昔男の「芦辺よりみち来る潮」の句から「こもり江」を想起し、心の中にこめた思ひの隠喩として

機智と「いちはやきみやび」(一)とが物語られ、「ゐなか人のこ
とにては、よしやあしや。」といいながら、みやびな物語をつくり
あげている。「あしべより云々」の歌は、「あしべより満ち来る潮
のいやましに思へか君が忘れかねつる」の万葉卷四、(六一七)山
口女王の歌を改作したものである。このように多くの歌を改作し、
作者の意図に従属させている。だから作者は、貴族社会にくみとら
れた前代からの民謡的な口承歌とか伝誦歌とかを、さらに彼らの意
図により、作りかえてみやびな物語を生み出しているのである。そ
して時には短篇小説的な整つた形態をもつ珠玉の説話までも生み出
すにいたつている。その好個の例として第六九の説話がある。これ
は古い伊勢の一本に、その巻頭にあるということで、題号論と関係
づけられている業平と伊勢の齋宮との恋愛をあつかつたものであ
り、伊勢の説話群中の白眉ともいわれている説話である。この説話
は、すでにいわれているように、古今集のうちに「業平朝臣の、伊
勢国にまかりける時、齋宮なりける人の、いとみそかにあひて、又
の朝に、人やるすべなくて、思ひをりける間に、女の許よりおこせ
たりける。

よみ人しらす

君やこしわれや行きけむおもほえず夢かうつつかねてかさめて
か

かへし

かきくらすこころの闇にまどひにき夢うつつとは世ひとさだめ
よ

とみえているのを引くまでもなく、当時の貴族社会にあつて、業平
伝説の一つとして語られていたものであろうし、かなり人口に膾炙

されていたにちがいない。だが作者は、この口承文芸を素材としてふまえて「みやび」にして「あはれ」な情趣にうるおう美しい恋物語を巧みに創り上げているのである。

古今集では、その詞書に「齋宮なりける人」といい、歌には「よみ人しらず」としてある矛盾は、当時おやおやけの勅撰集におさめるために、そのところをぼかしているようであるが、それはむしろそれほど周知の業平伝説であつたことであかしである。「君やこし」の歌は、「よみ人しらず」としてあり、齋宮の作とみせているが、実は古今にある通り「よみ人しらず」が正しいのである。というのは、この歌はそもそも民謡的な歌であるからだ。それは万葉卷十二、「正に心緒を述ぶる」に「現にか妹が来ませる夢にかも吾か惑へる恋のしげきに」（二九一七）の類歌であることによつて知られるし、それが貴族社会で口伝えに伝承されていくうちに、業平伝説と結合されたと思われる。なおその詞書のうちで、「業平朝臣の伊勢の国にまかりける時」とだけしるしているのに対して、伊勢では、「むかし、男ありけり。その男いせの国に狩の使にいきける」と、その伊勢に趣いた理由を具体的に「狩の使」と限定し、古今の詞書からは、およそ想像もされない別の世界（「夢うつ、」の世界）を創造している。つまりこの頃の通例として、地方へ下る勅使は、その地方の国司に依つてあらゆる接待をうけたのであるから、その宿所を神聖な齋宮のうちにとるのは異例である。そこにまたフィクションがある。そしてそこで「齋宮なりける人」とただならぬ恋におちるといふ業平の恋愛譚を展開していくのであるが、この恋そのものが神聖な齋宮を冒瀆する異例な恋であり、そこにもまたフィクションがある。そのようなフィクションを通して、それをより真実

に読者の胸に訴えるために、作者は「国の守、齋宮のかみかけたる」とし、さらに「かの齋宮なりける人のおや、『常の使よりは、この人よくいたはれ』」といわせることで、合理化している。後人の加筆の簡処といわれている末尾の「齋宮は、水尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の親王の妹なり。」をみればわかるように、恬子内親王であり、紀有常の姪であるからその「人のおや」（母）は紀静子であり、有常の妹である。業平は、その有常の女婿であるから、叔母に当り、齋宮は義理の従妹になる。当時の読者は業平をめぐるこれらの関係は知りつくしていたであろうが、後にこの関係がわからなくなることをあやぶんだ者が、この説話の「心ばへ」（一）がそこなあることをおそれて、このような加筆をしたのであろう。かくの如き知悉の関係をふまえて考えれば、齋宮の母の言葉は、単なる勅使に対する以上のものであることが感じさせられるし、純情な齋宮の小さな胸のうちに特になつかしい感情をわきあがらせていつたのであろう。作者はそのような彼女の心の動きを言外にただよわせて、きわめて簡潔に「親のいふ事なりければ、いとねんごろにいたはりけり。」とさりげなく表現していることが、かえつて読者の心にもどかしいまでの余韻を含みだかせながら、ついに「いひつきにけり。」となり、男にも情愛のぬくもりをおこさせたにちがいない。そこで第一日目が終つている。やがて「二日といふ夜、男わかれてあはむといふ。女もはたあはじとも思へらず。」という心境にまで移りゆく内的な必然性が感じとられる。そこでいよいよ二人の逢瀬となるのであるが、作者の筆のはこびは慎重である。「使ひざねとある人なれば、遠くも宿さず、女のねも近くありければ、女、人をしずつめて、子ひとつばかりに、男のもとに來たりけり」と、女

が男のもとへいくことを可能ならしめた条件を、すべて整えることを怠つてはいない。さらに、そのプロセスの描写がすぐれている。

「月のおぼろなるに、人のかげするを見れば、ちいさきわらはを先に立てて、人たてり。」人が寝しずまつた深夜に、小さな女童を先に立てて男の寢室に忍ぶ齋宮、折からおぼろな月影がほのあかるく照らしている。ねむれぬままに女を思つて沈思している男は、ふと人影のうつるのを見た。みれば小さな女童と齋宮が目の前に立つていたという場面は、まさに「夢うつつ」の夢幻境ともいえる浪漫的な雰囲気だによつていられる。「男いとうれしくて、わがぬるところにゐて、」というおさえきれない程の喜びもありありと想像されるし、だからこそ「まだ何事も語らひあへぬほどに」時の過ぎ行くのもあつてなく感じたことだろう。まことに簡にして要をえた適切な表現がなされ、深く読むものに食い入つてくるほどのリアリティがある。やがて女「かへりにけり。男いとかなしくて、寝ずなりにけり。」ここで第二日目が終わつている。そして次に「つとめて」として第三日目の叙述に入る。「いぶかしけれど、わが人をやるべきにしもあらねば、いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるほどに、女のもとより」「君やこし」の歌が来る。「男、いといたう泣きて、」「かきくらす」の歌を「よみてやりて、狩に出でぬ。野にありけど、いととくあはむ」と思つていると、国守兼齋宮寮の頭が、一夜中、勅使のための酒宴をひらいて饗応したので、あうことが出来ず。「男も女も、人知れず血の涙を流」した。「夜やうやう明けなむとするほどに、女のかたより出すさかずきに」「かち人の渡れどぬれぬえにしあれば」と書いてあるのを見て、即座に「そのさかづきのうちに、つい松のすみして『またあふ坂の関

は越えなむ」と「いちはやきみやび」(一)、「こぎかしき風流といふ心」(高尚)なふるまいに及んでいる。そして「明くれば、尾張国へこえにけり」という結びは、哀れなこの悲恋物語におけるかぎりない哀恋の情をただよわせ、読むものに悲哀の感情にしみみとひたせずにはおかない。「この一段は、この物語を通じて最も魅力あるものとされて来た」(窪田空穂「伊勢物語評釈」といわれているのも、故なきことではない。この説話にいたつては、もはや歌は地の文いかえればストーリーに全く従属している。しかしそのうちにあつて抒情詩独自の持味が全く殺されてはいない。むしろ縹渺とした「夢うつつ」の夢幻的な恋の情緒と、はかなく破れゆく悲恋の悲しみなどが、余韻と余情とをもつて、私たちの胸のうちに長く尾をひいて、波紋のようにひろがつていく効果を果している。業平の歌や万葉以来の口誦歌を駆使しながら、このような虚構による人間的な恋に失意する悲しい真実を描破している。そこに時代をこえた人間的な悲哀の真実を適切に無駄なく形象化している。窪田氏は「勅使として伊勢に三日間を留まる」ということは、この事件をあわれ深いものにするには絶好の条件である。」

(前掲書)といわれているのはもつともなことであるが、また三日に限定することによつて、この説話の構成を立流に組織立てている。それは「はじめあり、なかあり、おわりあり」という叙事詩としての構成要素を具備している。すなわち第一日目では、昔男が勅使として伊勢の国に狩の使に行つたことから、やがて齋宮が「いひつきにけり」というところまで描き、第二第三日目に齋宮との恋愛譚を語る条件を虚構し、そこに文芸としての真実さを語る諸条件を整えている。いわば物語の発端である。第二日目では夜半齋宮の訪

れによつて二人の恋は結ばれ、最高潮に達する。第三日目では、いやがうえにもつのりゆく二人の逢瀬への欲求が、その熾烈さを加えていく矢先に、国司の酒宴への招待という悪条件が敷設され、そのために、「夢うつつ」のようなはかない恋へと急速に転化させられて行く、そこに三日に限定することによつて、一層そのあわれさが長く尾を引いて、人の心に深く印象づけずにはおかないほどの、きわだつた構成法として文学的にすぐれた効果をしめしている。ここにこの物語の結末がある。そして末尾の連歌にあらわされている有心の情趣とともに構成の巧みさがあるといえよう。このような構成のうちにおいて、その「君や来し」と「かきくらす」の贈答の和歌は、もつとも短い時間的経過のうちにおいて、登場人物間の心理の推移が語られている。

そもそも和歌そのものがもつ「静物的な取り上げ」方（近藤忠義氏「短歌の永続性」法政大学国文学誌昭和十一年一輯、後「日本文学原論」所収）、すなわち「人事を取り扱ふに際しても、生活の全面的な姿を捉へ得ず、主として「恋」とか「別離」とかいふ——面その一般的な「本来的」なたたずまひに於て——「取り上げ」（前掲原論）ている。が、そこでの和歌は、元来ストーリーとは一応無関係に存在しているものであり、それを作者が業平伝説によるあらたなる説話として創造しているのである。そのように静的な短歌の表現をもつて、何時、誰が何処で、どうしたという事件の推移を連続の相において物語る物語文学のうちにあつて、心のはりつめた状態の描写、心理のデテエルをとらえる適切さ、それとともに余韻とそのひろがりをもたせるという伊勢をつらぬいているすぐれた表現法を形成している。それはまた、「ことばのみやびとのみに

して、ことわざごとなどまじらはざれば、おほくの物語ふみとはそのふみいとあでなり」（「伊勢物語新考」海量）といわれる優雅な文章とともに、あざなわれて創出されている。

そこで齋宮の純情な積極性も、おぼろな情趣（「みやび」な「あはれ」）による王朝的な美意識をもつて、哀愁をおびた悲恋物語に洗煉され、こんじゆくした作品を美しく結晶させている。

それはまた当時の貴族たちの、いわば社会的生活的理想としての「みやび」にてらして描いているところに、この物語における抒情性と叙事性が矛盾することなく融合されているのである。ここにこの物語の基説の精神が、文学作品として美しく結実した姿をみる事が出来る。だからこの説法中で齋宮の歌とされている口誦歌は全くそのみやびにしてあわれな情趣を表現するために改変され、役立てられているのである。

(三)

先にもみてきたように、伊勢物語中業平の歌以外の多くが、万葉以来の民謡的な口誦歌や古今集中の「よみ人しらず」の歌——これもほとんどが民謡風の口誦歌である——の類歌やその改作であるが、なかでも古今集のうち、このような民謡的な口誦歌とか伝誦歌といわれるものが、約三割以上も占めているという事実には、実に驚かされる。

伊勢物語のうちでも有名な「筒井筒」の説話につぐ第二四の説話にある「梓弓ひけどひかねど」の歌が、万葉集卷十二の「物に寄せて思を陳ぶる」の歌の「梓弓末はし知らず然れどもまさかは君によりにしものを」（二九八五）とほぼ同じものであり、さらに卷二の

九八、卷四の五〇五、卷十一の二七八〇、卷十二の二九八六、二九八九、卷十四の三四九〇、卷十五の三七五七等々の類歌があり、さらに「神樂歌」の「弓」などと関係があるといわれている。その関係を考えると、たとえ神樂歌が神樂の行事の歌詞として、平安中期の宮廷の社会で行われたものであるにしても、「歌謡そのものの誕生は別のもつと古い、そしてもつと民衆的な古代歌謡の世界においてであつたのである」（日本文学史辞典「古代歌謡」高木市之助）からして、いかに伊勢の「梓弓」の歌が民衆的な口誦歌であつたかが知られるし、また「人知れぬの歌のある第五の説話は、当時の貴族社会に流行した謡物としての催馬楽の「葦垣」などと同類の素材もあつたものであるといわれている。そもそも催馬楽の「曲風は唐楽式で王朝の声楽を代表する遊宴歌謡といわれるが、歌詞は本来『路頭巷里の歌』であつて、催馬楽の名義がそうであつたかどうかは別として、馬子唄類似の古代歌謡から採択されたものが少なくないことは事実である。即ち歌の伝承教習者は、王朝の貴族であるにもかかわらず、その生産者は別の時代、社会の民衆であつた」（前掲書）ことを思いあわせるとき、そこに民衆の生活感情を通して生み出された民謡の曲風を唐楽式にかえることで、みやびなものにつくりかえたように、伊勢物語の多くの説話も、民謡をみやびな物語にまでつくりかえていたのである。

さて、これらの民衆の口誦歌の多くを、貴族社会での口承文芸としての語りのうちにとり入れられたものであろうが、それをくみとり、それをふたたび貴族社会での語りのうちによりみがえらせ、伊勢の作者をしてこの物語におさめるにいたつた契機は、伊勢のうちの説話の語るところを以てすれば、「みやこにありわび」（七）「身

をよなきものに思ひなして、みやこにはをらじ、住むべき所求めんとて」（八）「あづまへゆきける」（七）という、いわゆる「東下り」における九世紀末の貴族の地方移住と、第十の説話の素材が物語つている地方民衆社会との接触によるものであつたであろうと推定される。

七・八世紀の農民が歌垣（嬬歌会）の場において「歌のかけあい」がくりひろげられ、ふるい歌が数かぎりなくよみがえり、かえうたがとび出し、新しいうたも、次々にうたわれた。かれらのなかに、農民たちから「殿」（万葉卷十四）とよばれた族長らもたまじつていたにちがひなく、民謡が意識的に洗煉されて来、文学的資質をたかめてくる有力な要因をつくつたものと考えられる。またかれらの手でもうたは記録され、国府の官人に提供され、そればかりでなく、采女として宮廷にのぼつたかれらの娘は、貴人らの酒席で、郷国の鄙歌をうたつて興を添えたにちがひない。その逆の場合も行われて、狭いながらも、宮廷と農民社会とのうたの交流がおこり、白鳳期が、もろもろの部面で創造の気運をはらんでいただけに、その交流は、宮廷によつて積極的にすすめられたであろう。東歌の多くも、まさに、こうした交錯の、ゆたかな所産であつた」（北山茂夫「万葉の時代」）と述べられているのと同じように、平安初期（九世紀末）にも、このいわば万葉の白鳳期に匹敵するような時期が考えられる。したがつて平安朝初期におけるそのような時期にも、多くの民衆文芸が貴族社会のうちで口承され、「ふるい歌が数かぎりなくよみがえり、かえうたがとび出し、新しいうたも、次々にうたわれた」であろうし、京と地方の交流がふたたびおこり、「もろもろの部面で創造の気運をはらんでいた」いわば創造の

季節であり、創造主としての民衆の口承文芸が、貴族の文芸への想像力をかきたてて強い衝撃をあたえ、ここに貴族の手によつて蘇生するにいたるのである。創造の季節、いいかえれば民謡の季節であり、民衆の口承文芸が貴族文学創造の萌芽を胚胎させていった時期であつたといえよう。

万葉以後公的な場から退潮した和歌は、やがて漢詩文に席を占められていつたいわゆる空白時代といわれる時期にも、民衆の社会では、依然として民謡がうたいかわされ、うたいつづけられていたのである。そしてそれらと直接間接の接触とその触発のもとに個性鮮やかな六歌仙の歌を生みだし、やがて古今集の成立により、漢詩にかわつて宮廷における和歌復興の気運にまで、つき動かされていつたのである。古今集は文字通り古今の和歌の集成として、多く古くからの民謡を支めている。また明らかな素朴性とか、自然的な彫塑性とかいう古代前期的特質を多く保持している神楽歌や催馬楽などの民衆文芸の採択や、民衆の口承文芸をうけて貧しい竹取翁の生活から書き出される竹取物語などが創出されていつたのである。これらは仮名文字の発明によつて大きく促されたことはいうまでもないが、なにはともあれ、このような創造的乃至は採択的集成の気運のうちで、伊勢物語が業平伝説を軸として民謡ふまえながら、みやびな説話の集成をしつつ、新しい文字ジャンルを創造していつたのである。

またその一面、そのような気運は、九世紀初頭における漢詩文の隆盛に対する一つの抵抗のうちにつちかわれていつた。貴族が唐制を模した都市人たる才として尊重された漢詩文に対して、ようやく官僚的メカニズムによる人間的な制約からのがれ、民衆的なもの

へ、いいかえれば民族的な人間的結合への欲求が、万葉以来の民族的抒情詩としての和歌を楯としておこつてきたのである。そこで流布されている口誦歌や「よみ人しらず」の歌がよみがえらされ「業平体貌閑麗、放縦不_レ均、略無_二才学_一、善作_二倭歌_一（三代実録）」といわれている業平伝説が、理想的人間像——みやびを——として共応をもつてそれらの貴族によつて伝えられ、広められていつたのもあろうし、紀貫之の古今集の序などでは、もはや勅撰集としての榮譽を担いながら、かなりの自負をもつて和歌の復興を宣言するまでにいたるのである。かくて、それ以後八代集はおろか、二十一代集にいたるまでも、そのゆるぎない生命を保持していく基礎を確立するといふ意味での、空前の再生期を打立てた時期であり、いわば和歌の時節をむかえたのであることを考えるときに、当時竹取などに比して、和歌の説話集としての伊勢そのものがより文芸的なものとしてむかえられたにちがいない。また伊勢がこのようにその文芸性を、和歌という抒情詩のもつ特有性を十分に生かすことで、かちとろうとしたのではなからうか。そのことで文学としての新しい発言の場をきりひらいたのであろうと考える。ここに新しい歌物語といふいわば抒情的叙事詩が生み出されるにいたつた一つの側面があつたのであると考えられる。

（昭和二四年卒 立川短大講師）